

命をつなぐ力を 生み出すために

今日のお昼はお好み焼き。おなかもすいているし、出来上がったらすぐに食べたい…。でも、少し箸を止めて考えてみてほしい。その豚肉、エビ、かつおぶしなどは、一体どこで、誰が作っているのだろうか。

それでは、スーパーで買い物をする時、商品のラベルに目を向けてみよう。豚肉はメキシコ産、エビはベトナム産、かつおぶしはインドネシア産…。日本産ではないものが多いのに気付く。

さらに驚くのが、開発途上国と呼ばれる国々からの輸入が多いこと。『農業大国』ともいわれる日本だが、食料自給率は39%（カロリーベース、2012年）と、決して高くはない。日本の台所を支えてきたともいえる途上国。農業人口が8割を超え、

一大産業となっている国も多い。しかしそこに携わる人たちの生活は、必ずしも豊かとはいえない。自分たちが食べていくのも精一杯、という地域すらある。そこで国際社会は、彼ら自身がきちんと『食べる』ことができるよう、かんがい整備や栽培技術の指導など、農作物の生産性を高めるための協力を進めてきた。

しかし今、そんな途上国の農業が変わりつつある。

「どの時代でも、どの場所でも、国が発展するにつれて、農業の形は変化していきます」。そう話すのは、東京農業大学国際食料情報学部の板垣啓四郎教授。「農村部の暮らしが豊かになると、自給のためだけでなく、稼ぐための農業になっていくのです」。余ったら売るのではなく、現金収入の手段として市場で、売るために作る『農業へ』。日本が明治時代以降、まさにたどってきた道だ。

特集 農業

豊かさを生むシゴト

日々、私たちが口にする食事。その食材を調べてみると、実はその多くが開発途上国から輸入されていることに気付く。農村部の人口が多数を占める途上国。今、彼らが目指しているのは“稼ぐ農業”だ。

編集協力：東京農業大学国際食料情報学部 板垣啓四郎教授



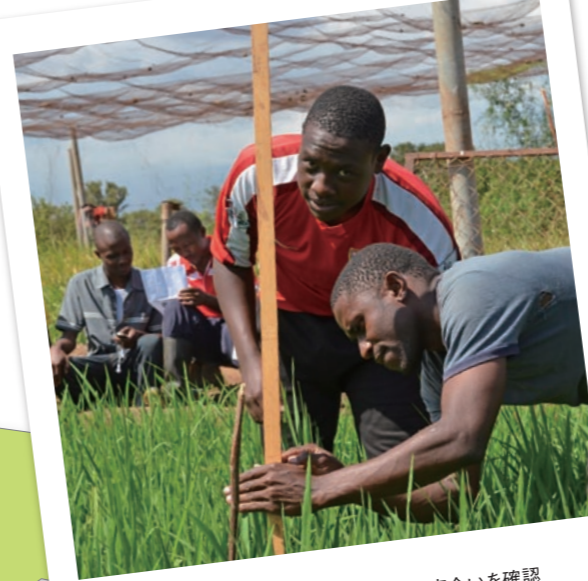
日本人専門家が各地に飛び、農作物の成長を見ながらアドバイス



稲刈りの時期は、家族総出の作業になる

途上国の子ども1人が
栄養たっぷりの食事を
取るために必要な費用は

1日30円



稲の高さを定期的に測り、成長の度合いを確認

栄養不足の人口の割合

(2011年~2013年)

5%未満 非常に低い	5~14.9% やや低い	15~24.9% やや高い
25~34.9% 高い	35%以上 非常に高い	データなし・不足

出典：国連WFP（世界食糧計画）ホームページ

特集 農業 豊かさを生むシゴト



世界で飢えに
苦しんでいるのは
8人に1人

「ミレニアム開発目標
(MDGs)」で定めた目標は

**2015年までに
飢えに苦しむ人を
半減**



かつては全て手作業だった農業も、機械化を進めて効率化を図る



種まき前の土づくりは、農作物の生産性を高める上で重要。みんなで念入りに行う

日本の強みを生かした 農業の協力

しかし途上国の農家の人々にとって、これまで市場はとても遠い存在だった。自分たちが手塩に掛けて作った農作物でも、市場に売りに行くのは仲買人。いったん田畑を離れると、その先の流通ルートや、実際に売られている様子をほとんど見るこ

とがなかった。自分たちで食べるだけならいい。しかし市場で売れるもの知らない。ば、自身の稼ぎにはつながらない。消費者が何を求めている、それに応えるためには何をすべきか。栽培する

量や時期を変えなければいけないかもしれない、青果だけではなく、加工食品の需要があるかもしれない。今まさに、農家の人々自身が「考える」農業が求められている。そこで出番なのが日本だ。北海道から沖縄まで、一国内で気候も土壌もさまざま。そんな中、地域ぐるみで知恵を出し合い、確実に「売れる」ものを考えてきた。その経験とノウハウは、これから新しい農業に取り組みう



農業開発を支える試験研究分野での人材育成に取り組む